

日本人初級外国語学習者の未知語推測方略の検証

Lexical Inferencing Strategies Among Japanese EFL Learners at Beginning Level

鈴木 健太郎

Kentaro SUZUKI

概要

未知語推測は英文理解や語彙知識の獲得において重要な役割を果たすが、語彙サイズが少ない初級学習者には困難であるとされてきた。本研究の目的は、初級学習者がどのように未知語を推測するのかを明らかにすることで、どのような方略の指導が必要であるかを検討することである。60名の日本人大学生がテキスト内の未知語を推測し、その後どのような知識源と推測方略を用いたか、そしてそれらがどの程度推測に貢献したかを問う質問紙に回答した。調査の結果、全般的に知識源と推測方略の使用はあまり見られず、推測の成否には未知語に含まれる情報（e.g., 形態素、語形）の影響を受けやすい傾向にあった。さらに、読み手の知識源の不足が方略使用の効果を妨げる可能性が示唆された。

キーワード：未知語推測、知識源、推測方略、初級英語学習者

Abstract

Lexical inferencing plays an important role both in text comprehension and vocabulary development though it has been considered to be demanding for beginner learners due to their limited lexical knowledge. This study examined how learners of English as a Foreign Language (EFL) at beginning level inferred unknown words to explore effective lexical inferencing instruction for those learners. A total of 60 undergraduates inferred unknown words and answered questionnaire about what kind of knowledge sources and inferential strategies they draw on while inferencing, and how helpful they were. The results suggested that both knowledge source and inferential strategy were not utilized overall, and their inference success was likely to be affected by the information within unknown words (e.g., morpheme, word-form) both positively and negatively. In addition, it was also implied that their lack of sufficient knowledge source might hinder effective strategy use.

Keywords: lexical inferencing, knowledge source, inferential strategy, beginner EFL learners

目次

1. 研究の背景
2. 手法
 - 2.1 協力者
 - 2.2 材料
 - 2.2.1 推測課題
 - 2.2.2 質問紙
 - 2.3 手順
3. 結果と考察
 - 3.1 推測課題
 - 3.2 知識源
 - 3.3 推測方略
4. 結論

1. 研究の背景

英文を正確に理解する上で、テキスト内の多くの語彙を知っていることは重要である。しかしながら、母語話者と比較して、語彙数が限られている第二言語あるいは外国語としての英語学習者は読解中多くの未知語に遭遇する。未知の単語に直面し、その意味を明らかにしようとする際、最も利用される読解方略が未知語推測である。それゆえ、未知語推測の成功は、テキスト内の意味的ギャップを埋め、正確なテキスト理解を達成しに貢献する。また、付随的な語彙知識の獲得にもつながるため未知語推測は重要な方略の一つである (Huckin & Coady, 1999)。

Haastруп (1991) は未知語推測 (lexical inferencing) を “making informed guesses as to the meaning of a word in light of all available linguistic cues in combinations with the learner’s general knowledge of the world” 「全ての言語的な手がかりを学習者の一般的な知識と掛け合わせて単語の意味に関する情報に基づく推測をすること (拙訳)」と定義し、単なる文脈情報からの推測 (guessing) とは異なると主張している。すなわち、未知語推測はテキストに加えて、読み手の所有する知識を活用して行う能動的な行為であると言える。

Huckin and Bloch (1993) は、未知語推測を言語や読み手の持つ情報などの知識に基づく要素と意味を生成し、検証するためのメタ認知的方略からなる認知モデルを提唱した。このモデルによると、読み手はテキスト情報や既有知識を基に、未知語の意味情報の生成や仮説検証をするなどして、意識的に推測プロセスを調整すると仮定した。比較的近

年の研究において、Nassaji (2004) は読み手によるこれらの枠組みを知識源 (knowledge source) と推測方略 (inferential strategy) を用いて明確化した。知識源とは、形態素や統語情報などから談話情報を含む言語的情報と世界に関する非言語的な情報を指す。一方で推測方略は、知識源に頼らない、問題を解決したり理解するために用いられる認知的あるいはメタ認知的な活動を表すとした。そのため、未知語推測の成果は、これらの知識源と推測方略がどのように用いられるかと密接に関連していると言える。

知識源に関しては、テキストにおける未知語の意味を正確に推測する上では、未知語そのものの語彙情報などの局所的情報よりも、談話レベルの広範な意味情報を基に推測することの優位性が主張されている。しかしながら、実際には未知語周辺の情報が頻繁に利用されることが多く、仮に談話レベルの情報を活用しようと試みても、それらを統合して正確な意味を生成することは、語彙や統語処理などの低次処理に困難を抱える熟達度の低い読み手にとっては困難であるとされている (Bengeleil & Paribakht, 2004; Pulido, 2003; Wesche & Paribakht, 2009)。

Hu and Nassaji (2014) は、推測を得意とする学習者と苦手とする学習者の未知語推測方略を比較した結果、両者とも幅広いストラテジーを使用した一方で、得意とする学習者は、推測した意味や推測プロセスに対する評価やモニタリングなどのメタ認知方略を頻繁に利用することが示唆された。これは、推測する際の問題点を自覚し、意識的に推測プロセスを調整することで問題解決に結び付けられたためだと考察している。また、推測を苦手とする学習者の特性として、複数の推測方略を用いたとしても、それらをいつどのようにするかということが出来ておらず、また使用する手がかりも未知語周辺 (未知語あるいは未知語を含む文) に限定されている。これらのことより、未知語推測に成功するためには、推測方略の役割を理解し、知識源とそれらを適切に利用することが求められると言える。

先行研究をまとめると、テキスト内の未知語の意味推測は、どのような知識源を推測時に使用するかということに加え、どのような認知的・メタ認知的方略を使用するかということと密接に関連しており、またその効果や選択は習熟度など読み手の要因と関連していることが明らかになっている。そこで本調査では、これまで限られた語彙数のため未知語推測は困難であるとされてきた初級学習者を、推測方略の観点から再考する。具体的には、未知語推測に必要だとされている 3000 語未満の語彙サイズの初級英語学習者がどのような知識源や推測方略を用いて未知語推測を行っているかを検証し、それに加えて使用する方略がどの程度推測に有効であるかという認識 (有用性) との関係を探ることで、彼らに対しどのような未知語推測指導が必要なのかを提示することを目的とする。これらの事項を検証するために以下のリサーチクエスチョン (RQs) を設定した。

RQ1: 初級学習者が利用する知識源と推測方略にはどのような特徴があるか？

RQ2: 知識源と推測方略の使用頻度と有用性の評価にはどのような関係があるか？

2. 手法

2.1 協力者

調査は、英会話の授業を受講している国際経営学専攻の日本人大学生（1 回生）72 名に実施し、課題を全て完遂した 60 名（男性：54 人、女性：6 人）を分析対象とした（全 3 クラス）。年齢は 18 歳あるいは 19 歳で、日本の学校教育機関で 6 年以上英語の授業を経験している。調査の 2 週間前に、1000 ～ 4000 語レベルを対象とした望月語彙サイズテスト（相澤 & 望月、2010）を実施した結果、協力者の語彙サイズは 3000 語に満たないと推定された（平均 = 1292.3、標準偏差 = 395.2、最小値 = 654、最大値 = 2192）。

2.2 材料

2.2.1 未知語推測課題

テキスト内の未知語の意味推測を課す課題を作成した。読解テキストとして、実用英語技能検定 3 級で用いられた“Rick Hansen”を選定した（旺文社、2014）。ストーリーは、事故で身体的な障害を患った主人公が車いすスポーツでの活躍を通し、障害を持つ人への理解を高めたというものであり、内容は協力者にとってなじみ深く、ストーリー展開や段落構成も典型的で理解しやすいと考えられた。

推測課題の目標語には、協力者にとって未知であると考えられた 8 語を選定し、本文中では太字で示した（2 度以上現れる場合も目標語は全て太字で示した）。目標語の品詞の内訳は名詞 4 語、動詞 4 語であった。目標語以外でテキスト理解に支障をきたすと考えられる語はその他の高頻度の語彙に置き換え、テキストも短くした。最終的に 229 語のテキストに目標語が 13 語（のべ語数）含まれているため既知語のカバー率は 94.3% であった。また、目標語が本当に未知であったかを確認するために、回答欄には目標語が既知であったかを尋ねる欄を設けた。推測課題で用いたシートを資料 1 に示す。

2.2.2 質問紙

未知語推測課題の際に、協力者がどのように未知語を推測したのかを把握するために質問紙を作成した。質問紙は、未知語推測における知識源と推測方略に関する項目から構成された。先行研究で観察された知識源及び推測方略を基に、それらの使用頻度（どの程度使用したのか）と有用性（どの程度役に立ったか）に関する質問を作成した。

知識源に関しては、Wesche and Paribakht (2009) の分類の枠組みを採用した。その理由は、言語的・非言語的な知識源が包括的に挙げられており（全 11 項目）、また、言語的手がかりを、単語の知識、文の知識、談話の知識に大別しており、協力者がどの言語単位の情報源を利用しているのかが分かりやすいと考えられたためである。ただし、先行研究での使用頻度が低く、また本調査の協力者にとって親密度の低いと考えられる 2 項目

(i.e., 句読法に関する知識、テキスト様式と言語の使用域) を除外し、合計 9 項目を調査対象とした。推測方略の分類は、Nassaji (2006) による分類に従った。この分類では、推測方略を特定するための方略、評価のための方略、モニタリング方略 (全 6 項目) に分けられている。

それぞれの研究における定義を著者が日本語に翻訳し、必要に応じて協力者が理解しやすいように文言を修正した。知識源と推測方略の分類と定義をそれぞれ資料 2 と 3 に示す。そしてこれらの項目を、(a) どの程度用いられたのか、(b) どの程度役に立ったのかを、それぞれ 5 件法で尋ねた (表 1 参照)。

表 1. 回答尺度の例

| | | | | |
|-------------------|--------------|------------|-----------|----------|
| 1. スペルや発音が似ている単語 | | | | |
| 1-1 使用しましたか? | | | | |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 全然あてはまらなかった | あまりあてはまらなかった | いくらかあてはまった | ややあてはまった | 常にあてはまった |
| 1-2 どの程度役に立ちましたか? | | | | |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 全く役に立たなかった | あまり役に立たなかった | どちらとも言えない | まあまあ役に立った | とても役に立った |

2.3 手順

調査は授業時間内に実施した。まず初めに調査の概要及び目的を告示し、その後協力者は未知語推測課題に取り組んだ。8 分間で太字の目標語を推測し、回答欄に推測した意味を記入した。課題終了後、知識源と推測方略の有用性を評価する上での判断材料とするため、目標語の意味を提示し、クラス全体で目標語の意味を確認した。その後、推測課題の際のことを思い出しながら質問紙に回答した。その際、推測課題の用紙は参照可能であった。著者が質問を読み上げ、それに合わせて協力者が回答を行った。推測課題を含む全体の所要時間は約 20 分であった。

3. 結果と考察

3.1 推測タスク

課題遂行時に既に知っていた目標語は分析から除外した。目標語毎の正答数と正答率は表 2 に示すとおりである。目標語ごとの正答率のばらつきはあまりなく (11.5-18.8%)、14.9% という全体の平均正答率は、Nassaji (2004) の

表 2. 推測タスクの正答率

| 目標語 | 試行数 | 正答数 | 正答率 (%) |
|------------|-----|-----|---------|
| prize | 52 | 6 | 11.5 |
| wheelchair | 57 | 10 | 17.5 |
| disability | 58 | 9 | 15.5 |
| graduate | 48 | 5 | 10.4 |
| travel | 48 | 9 | 18.8 |
| collect | 46 | 7 | 15.3 |
| future | 43 | 6 | 13.9 |
| Total | 352 | 52 | 14.7 |

25.6%をやや下回るものであった。ただし、協力者の学習歴を考慮するとこれらの目標語が完全に未知であったということは考えにくく、断片的な目標語の知識が推測を機に活性化された可能性があり、過大評価している可能性があることは留意しなくてはならない。

3.2 知識源の利用

知識源の使用頻度と有用性の評価の結果を表3と図1に示す。全体的な評定値は使用頻度と有用性どちらも低く、3の値を超えたのは、語形の手がかりの使用頻度のみであった。このことから、今回の協力者は知識源をあまり利用せず、またそれらを推測に役立てることが出来なかったことが分かる。

表3. 知識源の使用頻度と有用性の記述統計とt検定の結果

| カテゴリー | 知識源 | 使用頻度 | | 有用性 | | t (59) | p | d |
|-------|----------|------|------|------|------|--------|------|------|
| | | M | SD | M | SD | | | |
| 単語の知識 | 語連想 | 2.55 | 0.91 | 2.45 | 0.91 | 0.88 | .381 | 0.13 |
| | コロケーション | 2.63 | 0.99 | 2.77 | 0.96 | -1.47 | .145 | 0.13 |
| | 形態素 | 2.90 | 0.86 | 2.85 | 0.90 | 0.50 | .616 | 0.06 |
| | 語形 | 3.03 | 0.99 | 2.37 | 0.86 | 5.73 | .020 | 0.14 |
| 文の知識 | 文の意味 | 2.68 | 0.91 | 2.82 | 0.85 | -1.30 | .197 | 0.15 |
| | 文における品詞 | 2.62 | 1.06 | 2.50 | 1.03 | 1.04 | .301 | 0.11 |
| 談話の知識 | 談話の意味 | 2.22 | 0.92 | 2.17 | 0.87 | 0.55 | .582 | 0.01 |
| | 形式スキーマ | 2.08 | 0.83 | 2.13 | 0.95 | -0.52 | .606 | 0.06 |
| 非言語知識 | 世界に関する知識 | 2.50 | 1.07 | 2.38 | 0.94 | 1.04 | .301 | 0.01 |

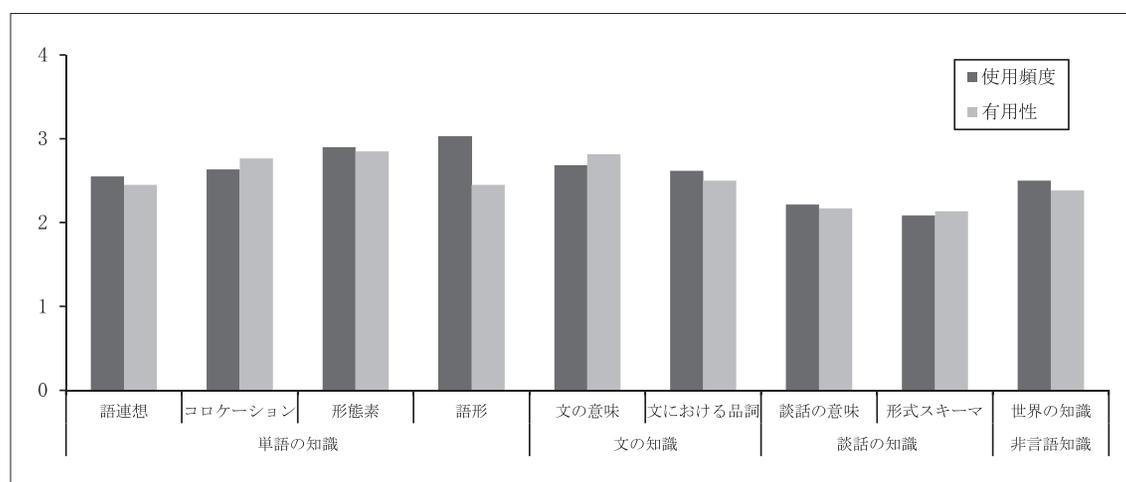


図1 知識源の使用頻度と有用性の評価

次に知識源のカテゴリーごとに見てみると、単語の知識の「形態素」($M = 2.90$)と「語形」($M = 3.03$)がやや頻繁に使用されていることが分かる。ただし、これら2項目は有用性の観点では異なる傾向を示していた。「形態素」(i.e., 屈折形態素、語根、接辞などの情報)は、使用頻度と有用性ともに同程度に評価されている($M_{diff} = 0.05$)。すなわち、協力者はこの知識源の有用性を理解して使用したと考えられる。その例として、複合語の目標語である“wheelchair”(車いす)に対する回答を見ると、正答または「いす」という情報を回答に含んだ協力者は57人中17人であり、“chair”という既知の手がかりによって少なくとも部分的な意味を推測するのに役立てることが出来たと判断したと推察される。

その一方で、「語形」(i.e., スペルや発音が似ている単語)に関しては有用性が低く評価され($M_{diff} = 0.66$)、統計的にも有意な差が見られた。この理由としては、この情報を使うがそれを推測にうまく活用できていなかったと考えられる。実際に、何人かの協力者は目標語の“prize”「賞」と“travel”「旅行する」に対し、類似した発音と綴りを持つ異なる意味情報を表す“price”「値段」や“please”「お願い」、「trouble」「問題」と回答していたことから分かる。また、後者の誤答例では動詞の目標語に対して名詞で回答しており、その協力者は語形情報のみで意味を推測している可能性が考えられる。したがって、この知識源への過剰な依存が誤答につながり、結果として有効活用できなかつたと判断したと考えられる。

談話の知識に関しては、「談話の意味」($M = 2.22$)、「形式スキーマ」($M = 2.08$)の2項目は、使用頻度と有用性ともにやや低い傾向にあることが分かる。これは、先行研究で示されたように、熟達度の低い読み手は、語形や文レベルの手がかりに依存し、またテキスト全体の意味情報を統合して意味を特定することが困難であるという結果とも一致する(Bengeleil & Paribakht, 2004; Pulido, 2003; Wesche & Paribakht, 2009)。

以上のことから、協力者は特に目標語である未知語そのものに含まれる知識源をやや頻繁に使う傾向があり、正しい知識を持っている場合にそれらを推測に役立てることが出来るという可能性が示唆された。

3.3 推測方略

推測方略の使用頻度及び有用性の評価を表4と図2に示す。知識源への評価同様、全ての項目に対して低く評価され、3未満の値となっている。

ここでは使用頻度と有用性の評価に差が見られた3つの方略(i.e., 「繰り返す」、「語形の類似」、「確認」)に焦点を当て、その原因を検証する。これらの方略は、使用頻度に対して比較的役に立たなかつたと評価されている。

まず第一に、「繰り返す」(i.e., 単語や単語が含まれている部分を頭の中で繰り返す)方

表4. 推測方略の使用頻度と有用性の記述統計と *t* 検定の結果

| カテゴリー | 知識源 | 使用頻度 | | 有用性 | | <i>t</i> (59) | <i>p</i> | <i>d</i> |
|--------|--------|----------|-----------|----------|-----------|---------------|----------|----------|
| | | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> | | | |
| 特定する | 繰り返す | 2.85 | 1.02 | 2.18 | 0.91 | 4.76 | .010 | 0.23 |
| | 語形分析 | 2.58 | 0.89 | 2.53 | 0.87 | 0.52 | .606 | 0.01 |
| | 語形の類似 | 2.60 | 1.11 | 2.27 | 1.01 | 3.08 | .001 | 0.34 |
| 評価する | 自問自答 | 2.40 | 1.14 | 2.35 | 0.94 | 0.44 | .659 | 0.04 |
| | 確認 | 2.67 | 1.00 | 2.38 | 0.88 | 2.38 | .021 | 0.28 |
| モニタリング | モニタリング | 2.53 | 1.02 | 2.40 | 0.96 | 1.66 | .103 | 0.13 |

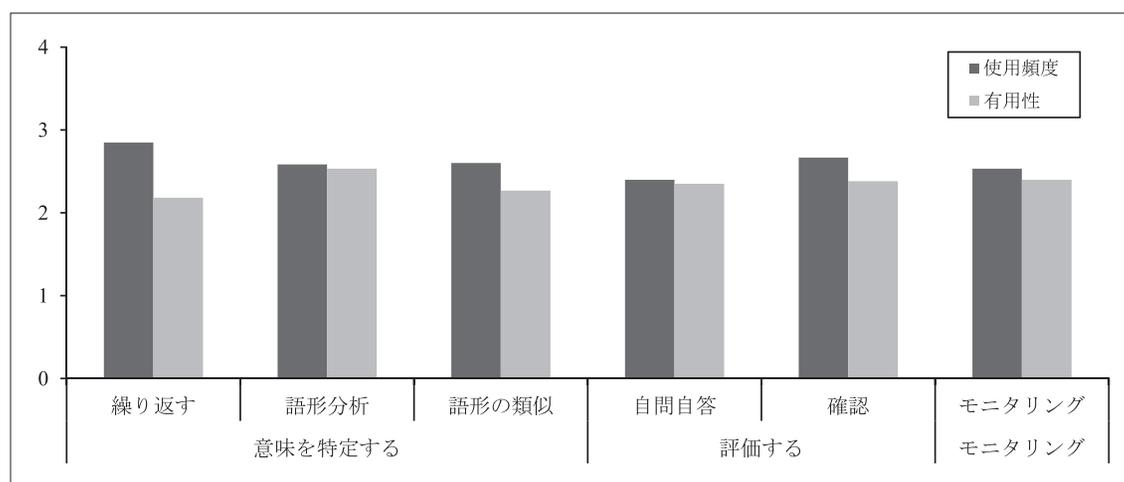


図2 推測方略の使用頻度と有用性の評価

略は、最も利用された一方で、有用性は最も低い評価された ($M_{diff} = 0.67$)。これは意味を特定しようという試みではあるが、その内容から考えても処理は表面的なもので、意味情報を明らかにするには不十分であったと考えられる。

次に「語形の類似」(i.e., 発音や綴りが似ている他の単語から類推する) に関しては、知識源における「語形」に関する考察で見たように、これらの方略からの意味推測が成功に結び付きにくかったためであると考えられる。

最後に「確認」(i.e., 一度推測した意味を広い文脈に当てはめて確認する) に関しては、驚くべきことに、この方略は先行研究では有効とされていたが (e.g., Hu & Nassaji, 2014)、今回の協力者は使用頻度と比べて有用性を低く評価していた。この不一致の考えられる原因としては、今回全員が課題を終えられるよう制限時間を十分設けたため、協力者によっては制限時間内よりも早く課題を遂行することができ、結果として残りの時間を確認のために充てることができたということが挙げられる。しかしながら、広い文脈に当てはめて確認することは、談話レベルの知識源の有用性が低かったことから難しく、協力者にとってはそれが推測の精度を高めるまでには至らなかったのではないかと考えられる。すなわち、確認方略のような推測プロセスへのメタ認知的取り組みの恩恵を受取る

には、知識源が学習者にとって十分利用可能な状況でなければならないという可能性が示唆される。

4. 結論

本稿は、語彙サイズが 3000 語に満たない初級英語学習者が未知語推測時に活用した知識源と推測方略を検証した。彼らの未知語推測の特徴は以下の 3 点にまとめられる。1 つ目は、初級学習者は知識源や推測方略は全体的にあまり使用されなかったことである。2 つ目は、未知語の形態素や語形の情報に基づく推測をする傾向があることである。3 つ目は、知識源の不足により有効な推測方略 (e.g., 推測した意味の確認) による効果が得られない可能性が示されたことである。

これらの結果をもとに、未知語推測指導を行う際の示唆を述べる。教員は未知語推測を実践させるためには、まず第一に、推測に使われる知識源にはどのようなものがあり、それらの効果や注意点を十分に理解させる必要がある。特に、学習者が未知語に関する情報に対しては、形態素のように意味に直接関わるものを教示したり、間違いを犯しやすい発音や綴りの情報などについて明示的に指導することは有効であると言える。そして、知識源に対する理解が深まった段階で、方略指導を導入することで、方略の活用に従事することができることが期待される。

最後に本研究の限界点を述べる。まず、本研究では短いテキストを用いたため、推測のための手がかりを十分に統制することが困難であったため、知識源の利用を十分に引き出せなかった可能性が残る。また、具体的にどのような未知語に対して、どのように推測したかと言うことは未検証であるため、思考発話法など個々の語に対する取り組み方も観察していく必要があるだろう。3 つ目に、今回は語彙サイズの小さい学習集者のみを対象に調査を行ったが、真に彼らの特徴を特定するためには、様々な語彙サイズや熟達度の学習者から得られたデータと比較する必要がある。これらの課題を検証し、適切な指導に生かすことができれば、未知語推測がどのレベルの学習者にとっても利用できる有効な方略となるであろう。

引用文献

- Bengeleil, N. F., & Paribakht, T. S., "L2 reading proficiency and lexical inferencing by university EFL learners", *Canadian Modern Language Review*, 61, 2004, pp. 225-250
- Frantzen, D., "Factors affecting how second language Spanish students derive meaning from context", *The Modern Language Journal*, 87, 2003, pp. 168-99
- Haastrup, K., *Lexical inferencing procedures or talking about words: Receptive procedures in foreign language learning with special reference to English*, Tübingen, Germany: Gunter Narr, 1991
- Hu, H. M., & Nassaji, H., "Lexical inferencing strategies: The case of successful versus less successful inferencers", *System*, 45, 2014, pp. 27-38
- Huckin, T., & Bloch, J., "Strategies for inferring word-meanings in context: A cognitive model". In T. Huckin, M. Haynes, & J. Coady (Eds.), *Second language reading and vocabulary learning*, Norwood, NJ: Ablex, 1993, pp. 153-178
- Nassaji, H., "L2 vocabulary learning from context: Strategies, knowledge sources, and their relationship with success in L2 lexical inference", *TESOL Quarterly*, 37, 2004, pp. 645-670
- Nassaji, H., "The relationship between depth of vocabulary knowledge and L2 learners' lexical inferencing strategy use and success", *The Modern Language Journal*, 90, 2006, pp. 387-401
- Pulido, D., "Modeling the role of second language proficiency and topic familiarity in second language incidental vocabulary acquisition through reading", *Language learning*, 53, 2003, pp. 233-284
- Wesche, M. B., & Paribakht, T. S., *Lexical inferencing in a first and second language: Cross-linguistic dimensions*, Bristol, England: Multilingual Matters, 2009
- 相澤一美・望月正道, 『英語語彙指導の実践アイデア集—活動例からテスト作成まで』, 東京, 2010
- 旺文社, 『英検 3 級過去 6 回全問題集』, 東京, 2014

資料

資料 1 知識源の分類と定義

| | | |
|-------|----------|-------------------------|
| 語彙知識 | 語連想 | 知っている単語やネットワークにある単語との連想 |
| | コロケーション | よく一緒に使われる単語 |
| | 形態素 | 屈折形態素、語根、接辞などの情報 |
| | 語形 | スペルや発音が似ている単語 |
| 文の知識 | 文の意味 | 単語が含まれている文の意味 |
| | 文での品詞 | 単語の文における品詞 |
| 談話の知識 | 談話の意味 | テキスト全体の意味 |
| | 形式スキーマ | テキストの構造や文書タイプに関する知識 |
| 非言語知識 | 世界に関する知識 | テキストのトピックや関連する背景情報の知識 |

資料 2 推測方略の分類と定義

| | | |
|---------|--------|-------------------------|
| 意味を特定する | 繰り返す | 単語や単語が含まれている部分を頭の中で繰り返す |
| | 語形分析 | 語根や接辞に単語を分解する |
| | 語形の類似 | 発音や綴りが似ている他の単語から類推する |
| 評価する | 自問自答 | 推測した意味を自身に問う |
| | 確認 | 一度推測した意味を広い文脈に当てはめて確認する |
| モニタリング | モニタリング | 推測の難易度に関して評価する |

資料3 推測課題

課題 次の英文を読み、太字の単語の意味を書いてください。制限時間は8分間です。

Rick Hansen

Rick was born in British Columbia in 1957. He was very good at sports when he was young, and his dream was to be in the Olympics. But when he was 15, Rick was in a car accident. Because of the accident, he could not walk, and he had to use a (1) **wheelchair**. After high school, Rick went university and first played **wheelchair** sports there. He was very good at these sports, and he won many (2) **prizes**. After he (3) **graduated** from university, he won six medals in wheelchair racing at the Paralympic Games in 1980 and 1984.

In 1985, Rick began a trip around the world called the “Man in Motion World Tour.” He pushed himself in his **wheelchair** 40,000 kilometers across 34 countries. He (4) **traveled** about 84 kilometers a day. The tour took two years and was very hard. Rick did this tour to (5) **collect** money for people with (6) **disabilities**. He also wanted others to understand people with disabilities better. The tour was a big success. It collected \$26 million to help people with **disabilities**, and people around the world learned more about people in **wheelchairs**.

In 1997, Rick started the Rick Hansen (7) **Foundation**. This group helps people with **disabilities** in many ways. Rick’s hard work has changed many people’s lives and will help people in the (8) **future**.

| 単語 | 意味 | もともと知ってましたか？ |
|----------------|----|--------------|
| (1) wheelchair | | はい ・ いいえ |
| (2) prize | | はい ・ いいえ |
| (3) graduate | | はい ・ いいえ |
| (4) travel | | はい ・ いいえ |
| (5) collect | | はい ・ いいえ |
| (6) disability | | はい ・ いいえ |
| (7) foundation | | はい ・ いいえ |
| (8) future | | はい ・ いいえ |